

| | |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title | 『ジャップの収容所』紹介：第IV部 |
| Sub Title | Jap camp : translation and annotation of selected interviews with citizens of Owens Valley : part IV |
| Author | 池田, 年穂(Ikeda, Toshiho) |
| Publisher | 共立薬科大学 |
| Publication year | 2001 |
| Jtitle | 共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.46 (2001.) ,p.9- 30 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Technical Report |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000046-0009 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ジャップの収容所』紹介—第Ⅳ部

池田年穂

Jap Camp—Translation and Annotation of Selected Interviews with Citizens of Owens Valley — Part IV —

Toshiho IKEDA

During WWII, some 110,000 Japanese-Americans, two-thirds of whom were American citizens, were interned in ten 'Relocation Camps.' First settled and the most famous, Manzanar camp was constructed in Owens Valley, California. So far, quite a few interviews with Japanese-American internees have been held. It seems, however, to be rather difficult to find the documentation of interviews with the 'ordinary' Caucasians who lived in Owens Valley during the period.

California State University Fullerton Oral History Program, officially inaugurated in 1967, keeps the tapes and its documentation of nearly 2,000 interviews. As to Japanese evacuation and relocation, Arthur A. Hansen and his staff began to concentrate on it in 1973. Their efforts inevitably included the interviews with Caucasians living in Lone Pine and Independence, both situated in Owens Valley and only several miles from Manzanar camp.

The text used for translation is *Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley*, 1978, CSUF. The title of the book was originally *Jap Camp* and was changed into the title above through the contest and charges from Japanese-American militants. **A long interview with Robert L. Brown, one of the high-ranking officials of Manzanar Project will be introduced in this article.** Readers might be recommended another book, Roger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out*, 1986, which contains interviews with Japanese-American internees.

I. オーラルヒストリー・プログラムについて

二十世紀に入って「録音」という技術が誕生したお陰で、インタビューが社会学的研究の重要な武器の一つとなった。

カリフォルニア州オレンジ郡に位置するカリフォルニア州立大学フラートン校 (CSUF) のオーラルヒストリー・プログラムは、1966年に講義形態として始まり、翌1967年に公的に発足している。ケースによっては20時間にまで及ぶ2,000人近い個人とのインタビュー、延べにして3,500時間以上のテープが保管されている上、48,445頁の文書として記録されている。インタビューーらのインデックスも、504頁にのぼる Shirley E. Stephenson, *Oral History Collection*, 1985 (以下OHCと略記) としてまとめられている。

その中でもとりわけ筆者の関心を惹くのは、1972年にアーサー・A・ハンセンを長としてから、より精力的に進められる事となった、第二次大戦中の日系米人強制収容についてのインタビュー (『エスニック・スタディーズ』部門の中の「日系米人史」プログラムに含まれる) の数々である。筆者の調べでは、インタビューーは140人 (同席者は除く)、インタビューの時期も1966年から1984年にまたがっている。因みに年度毎、性別、日系かそれ以外かの別については下のようになる。

| | | | | | |
|-------|------|-------|------|-------|-----|
| 1966年 | 6名、 | 1968年 | 1名、 | 1971年 | 6名 |
| 1972年 | 9名、 | 1973年 | 51名、 | 1974年 | 13名 |
| 1975年 | 3名、 | 1976年 | 17名、 | 1977年 | 1名 |
| 1978年 | 16名、 | 1979年 | 2名、 | 1981年 | 3名 |
| 1982年 | 3名、 | 1983年 | 4名、 | 1984年 | 5名 |

(不詳1名、1981年3名の内1名は1982年にもインタビューを受けている)

男 86名

女 53名

(不詳 1名)

日系 90名

非日系 50名

ユニークな点は、当然と言えば当然と思えるが、日系米人のみでなく白人(コーカジアン)、それも強制収容に直接には関わっていなかった一般市民へのインタビューが多数含まれている事である。第二次大戦中10あったリロケーション・センターの内、最も名高いのは、最初のセンターでもあったマンザナーであろう(それに次ぐのが、合衆国政府への「不忠誠者」を中心に再組織されたツールレークかと思う)。マンザナー収容所が事前の予告もないまま建設された地元のオーウェンス・ヴァレーの住民、ほとんどはそれ迄日系米人に関心すら抱いていなかった住民の反応をうかがうのに最適なインタビューが、無論インタビュー者各々の収容所や被収容者への意識や関わりにはかなりの深淺がありはするが、このCSUFのオーラルヒストリー・プログラムのコレクションの中にかくも見出し得る。

ことオーラルヒストリーについては、最新のものが最善とは限らない。筆者も数次にわたり日米加三国でオーラルインクアイアリーを試みてきたが、年月と共に試験者が物理的に存在しなくなったり、知的に衰える例は多い。また、後年になって種々雑多な情報や知識が入ったものをあたかも自らの体験のように錯覚したり、自分の経験やその折の感覚を自分の人生のパスpekティヴの中ではなく歴史のパスpekティヴの中に過度に整理して配列したり「合理化」したりする事も、ある程度は避けられない。また、高齢者によく見られるが、信憑性を高めようという意識からか、年月日等ディテールに非常なこだわりを見せる事もある。但し、インタビューはインタビュー者の話の矛盾を指摘する事に目的がある訳ではないので、裏付けや訂正のないまま録音されていく事になる。更に、インタビュアーが白人であるか日系であるか、はたまた日本から来た研究者であるかにより、インタビューの内容にニュアンスの差が生じる可能性も高い。勿論、インタビュアーの側の視点や態度もインタビューの成否に影響を与える。完全にニュートラルなインタビュアーというものは存在しないが、時として自分の歴史理解やステレオタイプにとらわれて、インタビュアーを誘導したり、質問の内容を自主規制する事もあり得る。これは1991年に筆者が翻訳を刊行したRoger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out*, 1986、邦題「リロケーション-日系米人強制収容の証言」西北出版、の「訳者あとがき」にも記した事だが、一世の中には、トラウマチックな体験を過小評価しようとする心理メカニズムを見せる者もいれば、社会的なレファレンス・グループをどこに求めるかによっては「キャンプ生活はヴァケーションじゃった」と表現する者もかなりいたが、一般にそうした発言は日本人研究者のインタビュアーには好まれない。

日系米人強制収容について言えば、「公民権運動」という全米的な分水嶺を越える前と後では、ターミノロジーさえ異なってくる。その一つが「ジャップ」という呼び方である。ジェシー・ギャレットとロナルド・ラーソンは1977年、第二次大戦中にオーウェンス・ヴァレーの住民だった白人達(1人、夫妻の内の妻の方が中国系)へのインタビューを20抜き出して*Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley*として刊行した。ところが、これは元々*Jap Camp*、「ジャップの収容所」というタイトルであり、そのタイトルで広告もうたれていたものが、前年1976年に一部の日系市民からの強硬な申し入れにより変更されたものである。その顛末自体極めて興味深く、我が国におけるパラレルな問題と重ね合わせる事も出来ようが、詳細の紹介は他の機会に譲る事とする。

合衆国の60年代は、公民権運動、ベトナム反戦運動、反公害運動の三つの運動で記憶されるであろうが、ジャップという言葉を用いるのは(ニップも同様)その時代背景の中では当然忌避されるようになっていた。それでも、例えばアグニュー・メリーランド州知事の1968年の副大統領選挙キャンペーンの途中での日系二世ジーン・オオイシに対する「ファット・ジャップ」発言のように、深刻な「失言」事件もおきている(詳しくは、当事者により、*In Search of Hiroshi*, 1988、翻訳は「引き裂かれたアイデンティティ」染矢清一郎訳、岩波書店、1989年、の中に書かれている)。本稿で紹介するインタビューの中でも、少しの底意もなくジャップという表現が用いられている例が見受けられる。無論、底意のなさにこそ未だ意識が改められぬ証しがあると見る事も出来ようが。

II. 紹介

本稿では、ロバート・L・ブラウンとのインタビューを紹介する。ブラウンは、OHCによれば、「マンザナー転住収容所で広報官、副所長を務めた。インタビューで語っている内容は、1930年代のカリフォルニア州インヨー郡での教員生活。戦前のインヨー＝モノ協会の事務局長としての活動。戦前のカリフォルニア州オーウェンス・ヴァレーにあったコミュニティーの社会、政治、経済面の構造。マンザナー収容所の立ち上げと拡張などである。とりわけ、収容所の広報活動、収容所管理部門と収容者双方の名士の人となりや経歴、『マンザナーフリープレス』紙の創刊と発展、マンザナー暴動の原因と結果などについて貴重な証言が聞かれる。」ブラウンは、元々が地元の名士であり、マンザナー収容所関係の記録には必ず顔を出す重要な人物である。

(9) ロバート・L・ブラウンは、インタビュー冒頭にあるように、1908年生まれ。1973年12月13日、1974年2月20日の2回にわたって、カリフォルニア州ラグーナヒルズのプエルタ通り2321Dでインタビューは行われ、計3時間30分のテープが残されている。Hは、インタビュアーのアーサー・A・ハンセン、Bが、インタビュイーのロバート・L・ブラウンをさす。

H：ブラウンさん。それでは、あなたの背景を少し教えて頂く事からインタビューを始めさせて下さい。お年、出生地、育った土地といった事からお願いします。

B：まずお信じにならないかも知れませんが、私は65才なんです。自分でも信じられませんよ。私は1908年3月11日にサウスパサデナで生まれました。育ったのはロサンゼルスで、カリフォルニア州モデストのハイスクールに行きましたから、カリフォルニアっ子です。1927年から1931年にかけて南カリフォルニア大学に通い英語でB.A.を取得しましたが、専攻はジャーナリズムだったんです。それから1935年に大学へ戻って一般二級教員免許を取得し、最初はカリフォルニア州ビッグバイン、これはオーウェンス・ヴァレーにあるんですが、そこで2年教えて、それからカリフォルニア州サンガーで教えました。教えるのは本当に楽しかった。でもお分かりでしょうが、当時教育職にはあまりお金が注ぎ込まれませんでした。

H：何を教えていらしたのですか？

B：ビッグバインではほとんど何もかも教えていましたよ。英語、歴史、数学も少しとそれから音楽…私達は合唱隊を集めたんです。オーケストラの方はどうもうまくいきませんでした。1年間だけ、1人の学生にだけですがラテン語を教えた事があります。

H：ビッグバインはインヨー郡のどこら辺に位置するかというと…

B：インディペンデンスとビショップの間です。37人の学生と6人の教師のいるハイスクールが1つありました。100人生徒のいる中学も1つあって、そこには教師が7、8人いたように思います。

H：当時のビッグバインでは人々はどのように暮らしを立てていたのですか？

B：主に、牧羊と牧牛です。あの頃は、彼らは、まだオーウェンス・ヴァレーの大部分を所有していたロサンゼルス市水利エネルギー局から土地を借りていました。インディアンの人もかなりいて、私達の学生の半分位はインディアンでした。

H：インディアン達はかなり町の生活に融けこんでいましたか、それとも自分達だけで固まっていたか？

B：かなりの程度、自分達だけで固まっていた。インディアン管理局があそこにやって来ていくつか大変居心地の良い小さな家を彼らのために建てました。ところが、自分達を「自由で独立したアメリカインディアン」と呼ぶ別のグループがあって、自分達の土地に住んでいました。もっとも、その土地は水利エネルギー局からいわば分捕ったものでしたがね。居座った人々だったのですが、誰も彼らに大して注意を払いませんでした。インディアンのほとんどは、周辺の牧羊者や牧牛者にかなり良い待遇で雇われていました。貧困の問題とかそうした事はなかったですね。彼らも皆学校へは行ったし、ほぼ全員がハイスクールを出て、大学へ進んだ者も少なくなかった。あの頃はインディアン文化についても大変良く教育を受けていたし、彼らはかなり裕福なインディアンで、全般的に見て私がこれまでに知り合った他のいくらかのインディアン達よりずっと知性もありましたよ。

H：あなたのビッグバインでの暮らしはどのようなものでしたか？ 退屈なさいましたか？

B：いいえ、ビッグバインは大変面白い小さな町でした。人口500人程でね。当時ガソリンスタンドが1軒、郵便局が1軒、電信局が1軒、二階建てのホテルが1軒、モーテルはありませんでした。それから夏だけ開く中華料理屋が1軒ありました。冬の間はその中国人は探鉱に出かけていたんでね。

H : 中国人人口は多かったんですか？

B : 探鉱をやっている中国人1人きりでした。

H : 私はヴァレーまで行って何人かの人と話してきましたが、明らかにあそこには嘗ていくらかは中国人のコミュニティがあったようですよ。

B : ええ、その通りです。

H : 当時ビショップに中国人のコミュニティはあったのですか？

B : いいえ、中国人達はインディペンデンスとローンパインにいたのだと思います。カリフォルニアでのあのゴールドラッシュの後で、メキシコ人達があの地方に来ましてね…メキシコからやって来たメキシコ人達ですけど…あの地帯に金や銀が少々あったとしたら、メキシコ人達が一切きれいに拾い取っていきましたよ。それから、メキシコ人達の後に中国人達が来まして、ホワイトマウンテンへ入って色々な峡谷で成果を上げていたようです。それで中国人コミュニティが始まったんですが、私がそこに行った頃までにはウイン・フーを除いてほとんどが去った後でした。フーは夏場には町で最も腕の良いコックでした。それに最も腕の立つハンターの一人でもあって、よく人々を狩猟に連れ出していました。そして冬になると探鉱に出かけたんです。

H : それなら中国人は、鉄道敷設の結果としてオーウェンス・ヴァレーに入ってきたと言うよりは、銀鉱探しのために来たんですね？

B : ええ、彼らは皆探鉱をやっていました。鉄道の方で誰か中国人がいたとは思えませんね。

H : ビッグパインで教えておられる間に、あなたは時折りローンパインやインディペンデンスやビショップにも出かけていらしたのではないかと思います、あの地域に誰かアジア人のいたのを覚えておられますか？

B : 私は知りませんね。いませんでしたよ。バスクの人達は多かったですね。何せ牧羊地帯でしたから…ビッグパインにもバスク人が一人二人はいたけれども、大部分はビショップに住んでいました。今でもかなりバスク系の人が住んでいますよ。でも東洋人はいませんね。

H : 先程インディアン管理局とピュート族との接触について言及されましたが、戦時転住局 (WRA) の職員の多くはインディアン管理局の出身なのですか？

B : その通りです。多分職員の50%がインディアン事務管理局の出身でしょう。

H : あなた自身はインディアン管理局と何か関わりをお持ちでしたか？

B : いいえ、当時は全くありませんでした。インディアン管理局の事は何も知りませんでした。

H : このWRAの職員達のほぼ50%がインディアン管理局から採用されたという状況はどのようにして生じたとお考えですか？

B : そうですね、よく考えてみないと。ちゃんと順序立てて思い出さないといけない…私に言える事は、アリゾナ州のナヴァホ居留地の監督官だったシ・フライヤー (E・R・フライヤー) がワシントンの当局に選ばれてサンフランシスコに派遣され、そこから実際に10ヶ所の収容所を運営していたという事です。ワシントンの担当者の方は忘れまして。だから、フライヤーに雇われた人々の大半は、インディアン事務管理局から雇われたって事じゃないでしょうか。フライヤーがその事に大きく関係していると思いますよ。

H : 彼らは居留地で強制収容されていた人々を扱ってきたから、別の強制収容されたマイノリティグループを扱う専門知識を有している、そんな風に理屈がつけられたのだと思われますか？

B : そう思いますとも。当時それは考えていませんでした。マンザナーでは、少なくとも当初は、そうした考え方が提示されていたわけではなかったのですね。ただ他の収容所向きの職員を募集している時に、農務省がインディアン事務管理局のどちらかから採っているという事には気が付きました。

H : 多分上層部のかなりは農務省の人達で占められたのでしょうか？

B : そうです。ディロン・マイヤーが戦時転住局長に任命された時がそうでした。ほぼ戦時転住局の発足時だったと思います。ディロン・マイヤーは農務省出身でして、それから農務省の人々が入って来るようになったんだと思います。ツールレーク収容所を運営していたレイ・ベストを知っていますが、彼も農務省出で、それもかなり上の方にいました。私達の所へ来た人も大勢いましたが…そう、うちの農業関係、マンザナーのすべての農地を運営していた男も農務省の出身でしたし、マンザナーの技師長のサンドリッジという男も農務省出身だったと記憶しています。言ってみれば、インディアン事務管理局と農務省の二つの派閥があったというところですね。

H : ご自身はそのどちらとも接触がなかったのですか？

B：どちらとも接触がなかった、その通りです。

H：当時あなたは、教職からすぐにマンザナーでの地位に移られたのですか？

B：それはですね、教え出して3年してからの事でした。夏場には私は、ヨセミテ国立公園で、運営部門の輸送セクションで働いていました。だけど、ビッグパインとビショップにいくらか友達ができていたし、オーウェンス・ヴァレーの人達みんながあの頃は暮らしていく上で大変苦労していました…大恐慌の時ですからね…それで、ロサンゼルス市の水利エネルギー局が20年代にやって来てほぼ全ての土地を買収したんです…少なくとも90%の土地を所有していました。もっとも、人々にはまだ仕事がありました。青物屋もガソリンスタンドも洋服屋もありましたし、わずかばかりの夏の輸送手段を利用して、ハイシエラでの魚釣りなんかに来てたんです。

H：スキーは余りしなかったのですか？

B：当時はスキーなどしませんでした。スキーなんてものはなかったなあ。オーウェンス・ヴァレーには2、3人大変興味深い人物がいて、その頃もそうでしたしそれ以降もですが全国的に名を売ってました。一人がラルフ・メリットで、サンメイトレイズン栽培者協会の会長をしていましたが、当時もう商売を始めていました。それに先立って、メリットはカリフォルニアの米栽培者協会の会長もしていました。彼は、カリフォルニア大学出身で、実際一時はカリフォルニア大学理事会のメンバーでした。

H：だけど、メリットは元タインヨー郡の出身という訳ではなかったのですか？

B：ええ、インヨー郡の事を良く知っていましたが、出身者ではありません。彼がいつでも興味を持っていた事の一つは鉱山で、インヨー郡とモノ郡の鉱脈に関しては専門家でした。もう一人は、ローンパインのカトリックの司祭だったジョン・J・クロウリー神父で、存命中は記事に「砂漠の神父」の署名を使っていた人物です。神父は大変面白い人で…そう正に切れ者でした。教会とはちょっと揉めていましたね。モンシニョールでしたが、教会のやり方とは若干合わなくて、それでこの砂漠の布教区を選んで、日曜毎にデスヴァレーからビショップまでの地域を回ったものです。デスヴァレーで5時にミサを唱え、車で山越えをして9時半か10時にローンパインでミサ、それからビショップに向いて11時にまたミサ。そんな訳で神父はみんなを知っていたんです。

メリットとクロウリー神父の他にヴァレーの2、3人が加わって、ヴァレーにも商業会議所か広報局のようなものをつくる時期だと決めたんですね。何かの事情で、彼らが私がジャーナリズム専攻である事、ビッグパインの学校で教えていた事を思い出したんですね。一人がヨセミテにやって来て、1937年夏の事だったと思いますが、私がインヨー、モノ二郡の広報局のようなものの運営を引き受ける気はないか尋ねて来ました。彼らの言うには、「君はゼロから始めねばならないだろうが、君の後ろ盾として我々には新聞があるよ。」彼らはこの地域に一つ新聞を持っていたんです。「だけど君は自分自身を売り込んで、自分のサラリーを捻出するだけの資金を集めなければならないよ。」そこで私も言った。「いいですよ、やってみましょう。」で、やってみましたよ。当地に来て、初年度スタートさせるのに十分な資金を集めました。それが、インヨー＝モノ協会という、内実は広報局の始まりです。私達はロサンゼルスとサンフランシスコの新聞のスポーツ欄を少し割いてもらって、大規模な猟や釣りについての記事を載せ、読者が当地にやって来て経済に活を入れて呉れるようやってみました。

私達はかなりの成功を収めました。二つの郡のほとんどすべての会社や店に声をかけて5ドルから10ドルまでいくらでも良いからといって集めた2,500ドルの予算で始めました。頼んだ半分くらいの人から、お願いした半分くらいのお金を出して貰いました。戦争が勃発した時には、年に20,000ドルくらいの予算でした。今日から見れば大した額ではないけど、当時としては中々でしたよ。南カリフォルニアとサンフランシスコ沿岸地区の新聞には大いに応援して貰いました。私達には友人も多く、広報活動は確実に効果をあげ始めました…この地域の現状を見て下さいな。そんな風に持って来られたのは、私がインヨー郡とモノ郡の財界人と政界の人間…判事、地方検事、保安官…それに新聞人を皆知っていたからだと思っていますよ。

H：それでは、あなたは広報活動を推進していたのだから、彼らに貸しのあるセールスマンだったのですか？

B：そうですね、私は広報活動をしてこの地域を売り込んでいた、その通りです。

H：彼らに経済的利益が上がるようになりますか？

B：そうです。そうする上では、無論の事、ロサンゼルス市と緊密な関係を保って活動しなければなりません。市議会だけでなく、水利エネルギー局の職員達とですが。彼らはヴァレーにそれ以上人々がやって来る事については「石頭」でしたからね。

H：水不足のためでしたか？

B：いや、単に人々がやって来て、「さて、もう一つガソリンスタンドが必要になったのですが、建てる場所がありません。よって、ロサンゼルス市当局の方、片隅の土地でいいから貸すか売るかして貰えませんか？」と言ってくるきっかけを与えたくなかったんですよ。彼らはこの手の話が蒸し返されるのが厭だったんですよ。少なくともあの役所はね。私達にとって最大の問題は、水利エネルギー局の職員達とロサンゼルス市議会に、「今や新しい時代になっていて、ロサンゼルスは拡大しつつあり、ロサンゼルス市民はレクリエーションに出かける場所を必要としているし、それがオーウェンス・ヴァレーの町にあって悪い理由は何もないんだが、ただロサンゼルス市が土地を提供して呉れないだけだ」と認めさせる事でした。それに、農地ではなく単にロサンゼルス市の所有地というのも沢山ありましたし...

H：つまりまだ拡大する余地があったわけですね？

B：ええ、拡大する余地があったのです。で何とかこの問題の解決にこぎつけて、ロサンゼルス市が町の中に持っていた沢山の市有地を個人私有地に売却して貰いました。だからインヨー＝モノ協会自体も新聞では良く知られていました。ロサンゼルスの大変影響力のある人達の中にも、大きな組織が現状を維持しようとするのに抵抗して、小さなコミュニティが生活のために奮闘する様子を注視して呉れている者がいました。最終的に私達の大きな味方になって呉れた中には『ロサンゼルスタイムズ』紙がありました。私達は到頭『ロサンゼルスタイムズ』紙と、発行人兼編集長のハリー・チャンドラーを味方につけ、市当局をちくりちくりとやって貰いました。

H：第一にロサンゼルス市は土地を沢山に所有している、次にオーウェンス・ヴァレーの水を他所に持っていってしまうというので、インヨー郡ではロサンゼルスに対する反感は大きかったのでしょうか？

B：ええ、ええ。反感は大きかったですよ...老人は今でも反感を抱いていますよ。彼らは自分達の土地を盗まれたかと思っていましたからね。もう長い間議論されてきた事で、二度三度と書き記されても来た。とても面白い話だし、とても興味深い諍いですよ。

私達の味方の一人は『ロサンゼルスデイリーニュース』紙の発行人、マンチェスター・ボディという人でした。『ロサンゼルスデイリーニュース』紙はロサンゼルス唯一の民主党系の新聞でした。『タイムズ』を『エクザミナー』同様共和党系の新聞とみなすならですがね。ボディは何が起きているのか良く分かっていました。実を言えば、私はそれより以前に彼と会った事があったのですが、私にとって極めて親しい個人的友人になりました。当時水利エネルギー局の広報部長をしていたのはグレン・デズモンドという男で、彼も個人的にはオーウェンス・ヴァレーの住人には同情的だったのは確かですが、水利エネルギー局のとっていたスタンスを保つのが職務でしたからね。だけどグレンと私は本当に仲の良い個人的友人になりました。で、戦争が間近と思われた頃、それから現に宣戦布告されてから、日系のアメリカ人、それから僅かばかりの一世...日本生まれ...が太平洋岸にとって脅威だというので大いに非難の声があがり、日本人を何とかしなくちゃならんという苦情を受け始めたんです。当初、私達は、インヨー郡には鉱脈が多いから、多分戦時の金属採掘の俄か景気で有卦にいるんじゃないかと思っていたんです。実際、その通り思っていたんですよ。

H：その事を宣伝の中で謳われたんですか？

B：ええ、宣伝にそう謳いましたし、手に入る資源はみな書いておきました。インヨー郡は、ビショップをちょっと出た所に世界最大のタングステン鉱を持っているんです。今でも世界一です。

H：当時タングステンは採掘されていた？

B：タングステンは不足していましたから、こいつはいける事は分かっていました。

H：でも既に採掘していたんでしょう？

B：ええ、もう既に採掘していました。でも、シエラ・ネバダとホワイトマウンテン両山地のそこら中にタングステンはありましたから、鉱脈は沢山あって、それまでは多分目立った存在ではなかったんですが、今やタングステンの値段が上がってましたから...つまりですね、中国がタングステンの大半を産出していたが、中国にタングステンを採りには行けなくなった。これはとても必要な金属ですからね。そういう訳でタングステンの大ブームがあった。

まあ、話を戻しましょう。1942年3月初めに私はネヴァダ州ミンデンにいて、「スキーを出来るようにしよう」という恒例の宣伝スピーチをしていました。この頃まで、私達はスキーを事業化しようとしていたんです。まだ、出来ていませんでしたけどね。

H：どこにスキー場を作ろうとしていたんですか？

- B : マンモスとその周辺です。今ある所です。今は大変賑わっています。それから、ジューンレイクの周辺です。その時、水利エネルギー局のグレン・デズモンドから電話があって、緊急の大きな会合があるから『ロサンゼルスデイリーニュース』紙のマンチェスター・ボディと一緒に出席して欲しいと言うんです。ロサンゼルスまで来られるかと尋ねるんで、ええ行けますと答えました。
- H : どういう肩書きで出席される事になっていたのですか？
- B : インヨー＝モノ協会の事務局長としてです。これは商業会議所のようなものでした。商業会議所とは呼んでいませんでしたけど、インヨー、モノ二郡の実業家によって支えられた協会で、私とその公的なスポークスマンだったのです。私とその協会の広報活動をすべて行っていました。そんな訳でグレンが私に来られるかと打診してきたんです。言い換えれば、私はインヨー郡とモノ郡の人々の気持ちを代弁していたんですね。
- H : インヨー＝モノ協会の会長は誰でしたか？
- B : そう、初代の会長はクロウリー神父でした。二代目はブリッジポートの人間で、スリック・ブライアントという名でした。ブライアントはまだ存命だと思いますよ。
- H : ブリッジポートはモノ郡にあるのですか？
- B : ええ、ブリッジポートはモノ郡の郡庁所在地です。三代目の会長はダグ・ジョゼフという名の人で、ピショップのやりての青物屋でした。ダグもまだ存命です。まあとにかく、グレンは私に出かけてマンチェスター・ボディとミーティングを持つように頼んできた。その通りにしましたよ。実際には、私達はボディーの家に昼食をとりに行ったと記憶しています。そこでボディーが言いましたよ「丁度司法長官のビドルから知らせを受けた所なんだ。」明らかに彼は親しい友人だったのです。「大統領は何番だかの声明に署名する気になっているんだが、それが実際の所、日本人の祖先を持つ者をすべて太平洋沿岸諸州から追い出すというものだね。」諸州とは、カリフォルニア、オレゴン、ワシントン、それにネヴァダやアリゾナも含むんでしょね。声明文はちょっと忘れてしまいましたが、西部の11の州をカバーしていました。
- H : そのミーティングは恐らくもうちょっと早くに行われたんじゃないでしょうか？ 今お話しになっているのは、『行政命令九〇六六』の事だと思うのですが、それは1942年2月に出されたわけですから...
- B : その通り。その通り。最近あなたの方が沢山調べておられるんだから。仰るとおりですな。行政命令にはもう署名が済んでいた。オーウェンス・ヴァレーでは誰もそれに注意を払わなかった。多分、沿岸部では注意を払ったんだろうけど。こう考えたのを思い出しましたよ。「ミーティングでボディーは私達に何について話させたいんだろうか。タングステン、道路、土地、空軍、ひょっとして日本人の事かな？」もっとも、大して考えていた訳でもないんです。そこでボビーが言った「私は、たった今司法長官のビドルと接触して来たが、軍はすべての日本人を西海岸から移動させる事にした。それもすぐにだ。」さらに続けて、「私はビドルに提案したんだが、彼らを拘留するのに良い場所は、オーウェンス・ヴァレーなんじゃないかとね。」デズモンドも私も仰天しました。私達は尋ねました。「日本人はどれくらいいるんですか？」返事は、「そうさ、10万人位かな。」私は叫んだ、「そんな無茶な！ 私達には10万人の面倒なんか見られませんよ。一般市民はどうなるんですか？ いやいや、そいつはうまくいきませんよ。」そしたらボディーは、「君達二人が、司法次官のトム・クラークと会うように手筈を整えておいたよ。」二人というのは、水利エネルギー局のグレン・デズモンドと、インヨー、モノ二郡を代表して私という事です。ちなみに、トム・クラークは、後年最高裁判事になりましたがね。ボディーは続けて、「ビドルと大統領が、この件を実施し全員を移動させるための手筈を一から十まで整えさせるためにクラークを派遣して来たんだ。さしあたり今日の午後にはアポイントメントを取りつけているんだがね。」トム・クラークは、ロサンゼルス市の市庁舎に自分のオフィスを開かせていました。それで、私らはそこまで出向いてトム・クラークと会いました。クラークも私達に同じ事を言いましたよ。そうだ、軍は行動に出る、それも速やかにだってね。クラークは、日本人の祖先を持つ人間すべてを収監する場所として、オーウェンス・ヴァレーを有力視していました。だけど、多分私らの言う事にも一理ある、それをするのにオーウェンス・ヴァレーだけでは小さすぎる。それで、デス・ヴァレーや北モハヴェ砂漠の事も考えていたし、それこそいろいろな所に白羽の矢を立てていましたよ。
- H : その時点でマンザナーの名は出たんですか？
- B : いやいや、マンザナーの名なんか出ませんよ。彼らは、そんな場所がある事さえ知らなかった。単に、地域全体をまとめて考えていただけなんです。だから、私らは話すというよりもっぱら聞き役でした。クラークが言いましたよ、「あんた方二人、君のほうは水利エネルギー局代表だし、君のほうは郡の代表だから、二人でじっくりとこの件を考慮して、それから出来たらどうしたら良いかについて何かアイデアを持って来て

呉れ給え。」そこで、グレンと私は、グレンのオフィスに戻って、二日ほど考慮し、アウトラインのようなものを作って持って行きました。沿岸部から移動させる五体満足な人々がそんなにいるならば、しなきゃいけない事は山ほどあった。少なくとも、成人男子を忙しくさせておくのに、道路修繕とか仕事を作り出す計画が必要だった。それから、私の思いついた事だが、地域のリーダー達を、政府が任命する事になる委員会に取り込んだらいいんじゃないか。そうすれば、行政に加わろうという刺激になろうし、「私達は政府のために働いているんだ」という感覚を持てるだろう。少なくとも、委員会発足時のメンバーには、「貴殿はこの件につき検討すべく委員会に参加して頂けますか？」という司法長官からの手紙を出せば良い。それで私らは戻ってまたクラークと話しました。彼も言いましたよ、「それは良い考えだ。推薦したい名前のリストを呉れば検討しますよ。」その後、そうになりました。どういう経過だったかは忘れましたが、ラルフ・メリットは委員会に入れました。こうした話になった頃には、クロウリー神父は自動車事故で亡くなっていたので、入りませんでした。私達は、営林署長のロイ・ブースと高速道路局長のスペンス・ルードンも入れたし、他にヴァレーの主だった市民を4、5人入れましたよ。新聞をやっていたジョージ・サヴェージも入れましたよ。

H：委員会の名称を覚えておられますか？ オーウェンス・ヴァレー市民連盟だったのでしょうか？

B：オーウェンス・ヴァレー何委員会だったかな。多分どこかに記録が残っているでしょう。2、3年前に当地でそれに触れたのを見ましたよ。インディペンデンスの東部カリフォルニア博物館でだったと思う。そこにリストがあった。それで、リスト作成に2、3日かかりましたよ。恐ろしいスピードで進んでいるように思えた。トム・クラークは、サンフランシスコに出かけて、大きな広報会社を雇いました。筋書きを書いたり、軍を通じて地域の日本人達に布令を廻したりするのを補佐して貰うためにね。私が次に覚えているのは、何せすべてが2、3日の内に起こったんですが、トム・クラークの秘書から電話があって、私とビショップの新聞の編集者だったジョージ・サヴェージとに、アポイントメントが取ってあるからサンフランシスコに飛んでクラークやこの広報会社と話し合うようにと言ってきたわけです。で、私らはそうした。クラークはこう言った、「このプログラム全体で、新聞屋のサヴェージか、広報屋のブラウンのどちらか一人に私のために働いて欲しいんだがね。」するとサヴェージが、「私は、自分の仕事もあるし、考えさせて頂かないと。」

H：それは、『チャルファント』紙ですか？

B：そう、『チャルファント』紙です。サヴェージは、「私はちょっと無理だと思います。でも、ブラウンはやって呉れますよ。」そこで私はこう言った、「私も引き受けるべきかどうか分かりません。この件には、コミュニティー全体を仰天させるようなところが沢山ありますからね。」すると、クラークは振り向いてほほえみめいたものを浮かべて言った。「私は君に頼んだ訳じゃない。命令してるんだよ。もう私のために働いて呉れているんだから。」そんな風に雇われたわけです。私は、初めはWCCA（戦時民間人管理局）という名で設置された組織を代表したんですが、とりあえずそれを運営してたのはニコルソンという名の男でした。マンザナーの発足時からそこを運営するために送り込まれたのはクレイトン・トリッグスといって、CCC（民間植林治水隊）の元キャンプ責任者でした。

H：そこですが、WCCAの長はカール・ベンデットソンだったのでは？

B：ベンデットソンが長でしたね。ベンデットソンが、軍かCCCを通じてトリッグスを見つけてきたのは確かです。トリッグスは良い管理者でした、素晴らしい管理者でしたよ。大した奴でしたよ。だけど、あのWCCAというのは、4ヶ月、5ヶ月、精々6ヶ月しか保たなかった。

H：そんなにも保たなかったんじゃないですか？

B：そうかも知れない。

H：3月半ばから6月初めまでだったと思いますが。後は、WRAが引き継いだんです。

B：そうですね。あなたのほうが最近調べているんだから、良く理解しているはずですな。私は頭の中がすっかり錆びついてしまったんでね。こうした事が起きている間に…つまりサンフランシスコに会いに出かけたとかそんな事だけけど…工兵隊が誰にも告げずに、また誰の手引きも受けずにヴァレーにやってきて、ローンパインの周辺で噂を広め始めたんです。10万人の「ジャップ」をローンパインに連れて来るんだと言ってね。これで町はまさにパニックに陥りましたよ。前触れもない、委員会を通じての働きかけもない、サヴェージの新聞を通じての働きかけもなかったんですから。まるで自分達だけでやっていたんですよ。

H：その件については、その時点でまだ広報活動はなかったんですね？

B：何ら広報活動はありませんでした。この事態を私はトム・クラークを通して止めさせる事が出来ました。

H : というと、噂を広める事ですか？

B : 軍が当地にやってきた時、噂を広めるのを止めさせる事が出来ました。また、実際にやってくる際に、委員会、そうね例えば営林署の用事で来ているようにさせる事が出来ました。というのも、私達が軍のジープを乗り回して土地を見て回るのに、皆がこちらを追い回して、「軍はこれから一体何をしようって言うのかい？」なんて聞いて来るんじゃないからね。その類の事には、手を打っておいたわけです。

H : 当局はまだマンザナーを選んではいなかったんですね？

B : まだ敷地は選んでいませんでした。4つか5つの敷地を考えていたようです。一ヶ所はオランチャのそば、一ヶ所はビショップ周辺。ヴァレーの東側も考えていたようですが、そこだと水の問題があったでしょうね。オーウェンス川から水を引かなければならなかったでしょうから。それで結局マンザナーの敷地に落ち着いたんですが、あそこは昔はとても大きな林檎園だったのが棄てられていたんです。ちょうど真ん中を格好な小川が走ってしまっただけでね。

H : あそこには他に水道管も通っていたと思いますか？

B : でしょうね。だから、水は沢山あったわけだ。いずれにせよ、そんな風に私はこの件に加わったんです。

H : なるほど。ほんの少し前へ戻って、戦前のあなたのオーウェンス・ヴァレーでの活動についてもう少し詳しく知りたいのですが。

B : いいですよ。

H : あなたは30年代の半ばにビッグパインとサンガーの学校で教えられ、それからインヨー＝モノ協会の事務局長の職に就かれた。この職に就いていた1937年から1942年にかけて、沢山旅行をなさり、地域の実業家のほとんどとお会いになった。だからあなたは、この地域と住民をととても良くご存知だったわけです。ヴァレーの各地域についてももう少し調べて、各々の経済や指導者達の特性といったものを正確に捉えられないかと思うんですが。ローンパインから始めて北へ追っていく事にしましょう。当時ローンパインにはどのような経済活動がありましたか？

B : 牧牛と観光の経済でした。ほぼそれに尽きます。夏場に来る客の応対をする店員を雇っていた店があった。それから、20～30軒のますますの大きさの牧場。一、二大規模な牧牛業者もいた。夏には、牛をハイシエラに連れて上る。冬になると、オーウェンス・ヴァレーまで連れ戻り、そこで養う。しまいには、もう少し水を手に入れて、アルファルファやなんかを育てて、自分達で飼料をつくれるようになった。鉱夫もいました。その頃は、まだかなり採鉱があった。どちらかという、夢想家のそれという感じだったが、試掘は盛んに行われていました。ええ、ローンパインの西にある谷の一つでは、大きな硫黄の埋蔵地がありました。ダーウインの町では、まだ大きな鉛の選鉱場があって、100人から200人の人達が働いていましたよ。そこからローンパインにいくらかお金が流れて来てましたよ。

H : ダーウインはどこに位置しているんですか？

B : ダーウインはローンパインの東南、デスヴァレーへ行く途中です。

H : 広報の仕事をする上で、ローンパインの住民に何かを伝えようとした際、会いに行かれた町の重要人物はどんな人達でしたか？ 言い換えれば、ローンパインの中で誰が影響力を持っていましたか？

B : そうですね。ジョン・リュブキンはこの地方最大の牧牛業者で郡政執行官会議の議長でもあった。あの頃ジョンは、私らが渡り者を連れ込もうとする事が気に入らなかった。連中が、彼のところの柵を壊したりするからというんでね。リュブキンは特に計画に賛成というわけではなかったんですが、頭の良い、極めて有能な郡政執行官だったから、当地の経済は町のメインストリートの商人達によって維持されなきゃまずいんだと分かっていた。だから、リュブキンはそんなに辛辣じゃあなかったし、声高に自分の反対を唱えたりはしなかったけど、私が長い間、個人的に働きかけをした一人です。しまいには、私らは本当に親しい友人になりました。ローンパインの大きな店の一つは、アーヴィングというジョセフ兄弟の一人がオーナーでした。ダグラス・ジョセフの弟でしたよ。ドラッグストアが2軒あって、どちらも積極的でしたよ。当然の事、観光客相手の仕事が色々入りますからね。3、4軒レストランのオーナーもいたが、名前はちょっと覚えていない。大いに役に立って呉れたのはジャック・ホプキンス [第Ⅲ部で紹介済み... 訳注] でした。ホプキンスは今でもローンパインで金物屋をやっているし、ずっと郡政執行官会議のメンバーですよ。オーウェンス・ヴァレーへの取材旅行でジャックにお会いになっているかも知れませんが。そう、彼はヴァレーの事情は何でも良く知っています。ヴァレーとの関係は密でしたからね。4人か5人、小さなホテルの経営者もいました。ローンパインは小さな町でしたよ。人口は、1,800人、ひよっとしたら2,000人位だったでしょ

う。ずっと前には、もっと大きな町だったけど、その頃には随分と減っていたんでね。

H：あなたは、町の人達の心性をどのように描写なさいますか？ かなり田舎風の人達だったでしょう？ こんな感想を抱いたのも、私がインディペンデンスに滞在したからです。郡庁所在地ですし、多分政府の役人がいるからか、ローンパインよりは文化的伝統があるように見受けられたんですが。

B：それがですね、みんなオーウェンス・ヴァレーの歴史には大変な誇りを持っているんですよ。ヴァレーの年配の人間は皆そうですよ。私には、私の付き合いの人達は実に知的な人達に思えましたね。実際に、私は町の実業家皆と付き合いがありましたね。幻滅して人生一般に嫌気がさして、自分達は何の役にも立たん、事態は急速に悪くなる、それもこれもみんなロサンゼルス市が悪いんだ、とか何とか考えていた者もいたが、そう多くはなかった。ローンパインの主だった事業、つまりドラッグストア、青物屋、ホテルなど、この郡に観光客がもっと入って来れば利益があがる事になる経営者からは大変な支援を受ける事が出来ましたよ。彼らは、私達がロサンゼルス新聞と組んでやっている事の成果を見る事が出来ましたからね。観光客は、すぐに、本当にすぐに上り調子になりましたからね。レジには目立った変化が見られたし、それが何より...

H：それが何よりもものと言ったんですね？

B：そう、ものを言いました。私達は、事態の展開をととても嬉しく感じました。例えば、私達を分裂させようと工作する分派など少しもいませんでしたから。みんなが計画に賛成でした。

H：インディペンデンスについては？ どんな町だったのでしょうか？

B：そうね、インディペンデンスは、勿論郡庁所在地だったし、判事も地方検事も、郡の役人や教育関係の役人もあそこにいた。だから、あなたがインディペンデンスについて言われた事はその通りでしょう。インディペンデンスには、かなり知的な集団がいるし、これまでも常におった。例えば、教鞭を執る際には、郡の視学官事務所の助けを受けましたよ。

H：その頃の郡の視学官は誰だったんでしょうか？

B：まずエダ・ロビンソン、それから、ドロシー・クレーゲンでした。

H：ドロシー・クレーゲンですか？ [ドロシー・クレーゲンもインタビューを受けていて、原書に収録されている... 訳者注]

B：そうです。彼女はまだ存命で、郡史の編纂官を務めていますよ。ずーっと私達の親しい友人でね。1936年にサン・ホアキン・ヴァレーに移ってサンガーという小さな町で教えたんだが、ビッグパインが500人程度だったのにサンガーは1万人位いたんだけど、とても田舎でね、私の関わった限りでは極めて否定的な態度で迎えられた。私は若かったし、青年教師で子供達がちゃんとした教育を受けられるようにしたいと思っていたんだが、在郷軍人会の人間達から始まって、反対ばかりする特定のエスニック・グループにいたるまで、兎に角反対が多かった。「いまいましいジャップ」は好かん、「いまいましいメキシコ野郎」は好かん、そんな類の事だらけでしたよ。

H：だけど、インディペンデンスではそうした事は余りなかった...

B：インディペンデンスではそうした事はなかった。全くなかったですね。

H：インディペンデンスの政治的傾向はどうだったのですか？

B：主に共和党支持でした。だけど、啓蒙的な共和党支持とでも言うのでしょうか。今風の言い方をすれば、共和党進歩派でした。片意地な反対派はごくごく少数でした。

H：インディペンデンスの人達はどうやって生計を立てていたんですか？ 政府の役所が経済の重要な基盤だったのですか？

B：ええ、政府の役所やその支局、それに水利エネルギー局の支所でした。そんなものでしたね。町にはまた、青物屋だの、モーテル2軒だのって風にありましたが。

H：農園はありましたか？

B：いいえ、もうありませんでした。

H：それでは、牧場は沢山ありましたか？

B：1軒もありませんでした。

H：北に行って、あなたが最初に教えられた町のビッグパインに移りましょう。先程、その経済は主に牧牛と観光だと言われましたね。

B：牧牛と、観光の方は少しです。ローンパインで私達に大いに役に立って呉れた人で、言い忘れたのはウォルター・ダウの事です。ダウホテルは、彼の名にちなんで名付けられたんです。ウォルターは、かなりの資産

家でした。彼は、どこかよそで資産を築いてローンパインに移ってきたんです。ローンパインは、落ち目になっていたのにね。それから、彼はローンパインがもう一度地図に載るような町になるよう努力をして呉れました。彼は、材木置き場を始めたし、ホテルも建て始めた。地域の発展といった類の事には、大変積極的でした。当時のローンパインの支えと言ってよい人物だったと思います。

H：先程話に出た郡庁所在地のインディペンデンスではどうでしょうか？ 役人が沢山いたわけですが、インディペンデンスで力があつたのは誰だったのでしょうか？ インディペンデンスで力を持っていたなら、その意見はインディペンデンスにとどまらず重みを持ったのではと思えますが。言い換えれば、そういった人達は、郡全体に影響力を持ったはずでしょう？

B：州の上級司法裁判所判事が、その郡の役人の中で一番尊敬されていた人物でした。とても尊敬されていたし、優秀な判事でした。彼のスケジュール表は、ヴァレーではそれほど密ではなかったので、ロサンゼルスやサンフランシスコなど各地によばれる事が多かった。

H：名前を覚えておられますか？

B：ウイリアム・デヒーです。

H：現在、インディペンデンスには彼にちなんだ公園があるんじゃないですか？

B：ええ、デヒー公園です。ウイリアム・デヒー。それから、ジョージ・フランシスが私があそこにいた時の地方検事で、後に州最高裁の判事になりました。今は、南カリフォルニアで仕事をしていますよ。今でも、新聞で彼についての記事を読みますよ。彼は、全く因襲にとらわれない判事です。どんな点でかと言えば、それがどんな件であっても、自分自身で問題の根底を探ってみようとするし、係争当事者達に、法廷の外で、自分達同士で解決するようにさせますよ。とても彼に好意的な記事がいくつかありました。例えば、ごく最近の事ですが、『ロサンゼルスタイムズ』紙に、彼についてのいい記事が載ってました。ジョージ・フランシスはもう定年を過ぎているはずですが、まだ働いています。それからまた…その次に来た地方検事の名を今はど忘れしていますが、その人はインヨー郡の判事にまでなりましたよ。いずれにせよ、この人は評判が良かった。今でも良いですな。すぐに、名前を思い出しますよ。そんな訳で、興味深い人達がいくらかいました。そうそう、『雨のほとんど降らない土地』を書いたメアリー・オースティンが、インディペンデンスに住んでいましたよ。旦那さんは、郡の土地測量官でした。住んでたのは、私より以前で、多分、1900年から1918年にかけて位じゃないかな。彼女は、トップクラスの、深い考察をする作家になりましたよ。

H：ビショップについては如何ですか？ ローンパイン、インディペンデンス、ビッグパインといった町よりはずっと大きな町でしたが。

B：ええ、ビショップは、この地域で一番大きな町でした。面白い事に、町の大きさは、そんなに大きくは変わってないんですよ。私共のインヨー＝モノ協会の本部がありました。私があそこに住んでいた頃には、ビショップの人口はおよそ4,000人でした。今でも、5,000人位しかいない。ヴァレーのまさに中心でしたよ。釣りに行くとしたら、他のどの町から出かけるより、ビショップからの方が沢山の湖に行きやすかった。昔でも、マンモス・カントリーから1時間半から2時間とところだったね。マンモス・カントリーは、夏場しか開いていなかったが、なかなかのレクリエーションの場でしたよ。第一次大戦の間に、誰かがビショップの郊外のパインクリーク溪谷でタングステン鉱山を発見して、採掘していたんだけど、何らかの理由でタングステンの値が下がり、鉱山会社が山を棄てたか、倒産したかしたんですな。ラルフ・メリット達3、4人で、何とか再開にこぎつけ、大きなタングステン会社、そう、世界最大のタングステン会社のユナイテッドステーツヴァナジウムコーポレーションに買い取らせたんです。その会社は、経営に加わり、ずいぶん金も注ぎこんだ。戦争の3、4年前の事だった。戦争の近い事を嗅ぎつけたんだらうね。あそこで、巨大な削岩機を据え付けたし、鉱山そのものにも注ぎ込んだから、何百万ドルも費ったんだね。坑道は、10,000から11,000フィートは潜るものだったんで、そこまで行って、いつでも外気温より20から30度は低い10,000フィート底でも働けるように、どんな場所にも耐寒設備を備えたんですよ。一日二十四時間フル操業していたし、今でもそうだと思いますよ。世界で一番大きなタングステン鉱山ですよ。

H：それじゃあ、ビショップの経済は、基本的に鉱山中心で、いくらかは牛の放牧場があったという事だったのですね？

B：そう、いくらかは牛の放牧場もありました。

H：観光客も？

B：一番大きなものは観光客だったと思います。今日そうであるのは分かっていますが、当時でさえ観光業が最

大の収入源であったと思います。何せ、観光客を集め出すとたちまちにですね... そう、私がビショップに移った時など、どのブロックでも、2、3軒は店舗が空き家になっていたのですが、インヨー＝モノ協会が発足すると、一年足らずの内に建築が始まるは、人々が流れこむはで、目に見えて変わりましたよ。すぐに目に付く変わり方ですね。外に出て、その頃からずっと住んでるような人間に誰でもいいから聞いてご覧なさい。同じ事を言いますから。インヨー＝モノ協会が発足すると、すぐに目立って仕事が増えましたよ。戦争前は、スキー関連の事業も始められませんでした。まあ、戦争で歯止めがかけられていたんですね。でも、デーヴ・マッコイと私は、長い間にわたって個人的な付き合いがありましてな。デーヴと私は... うん、デーヴは今ではマンモスでスキーリフトの大きな設備を持っているんですが、水利エネルギー局のために働いていました。冬になると雪の深さを測るんですね。外に行って、雪の深さを測る。水利エネルギー局はそれを利用して、雪の固まりの中にどの程度湿気が含まれているかを計算して、取水を調節するといったような事でしたよ。主任水路測量官だったと思うがね。デーヴと私は、マンモスへの分岐を過ぎた所にあるクレストビューには、始終行ってました。当時はまだ道路が開通してなかったの、マンモスまでは行けませんでしたな。週末にはクレストビューまで上って行って、私の旧式なA型フォードを持って行って、車輪を外した上で外輪だけはめ直し、ジャッキで持ち上げてから、外輪に引き綱を回してそれを木に結びつけたんですよ。この地方で最初のロープリフトでした。その頃はまだ誰かから金を貰ってなんて考えてなかった。自分達だけで使ってた。そしたら、デーヴがある時言い出した、「考えたんだが、これを金儲けに使えないか。これを使わせて金を払って貰うのさ。」そこで私も言ったんだ、「そいつはいい思いつきだな。」結果として、デーヴはマンモスにあの施設を作ったんですよ。ご存じのようにね。いや、ご存じないかも知れないな。あなたは、スキーをおやりになりますか？

H：やらないんですけど、マンモスの事は少しは知ってます。

B：うん、デーヴは国際的に名を知られてますよ。実際にね。つまり、デーヴは...

H：ミスター・マンモスってわけですよね？

B：ミスター・マンモスってわけですよ。恐らく、誇張なしで1,000万ドルがそこ投資を集めたからね。何せ、ああした設備ですからね。それでもあいつは、今でも昔ながらのデーヴですよ。私達が、引き綱を使って木の所まで引っ張り上げられてた頃とちっとも変わってないですね。

H：この辺で、マンザナー収容所に大量の日系人が流入してくるのに対し、オーウェンス・ヴァレーの住民にどうやって心構えをさせたかについて話をしましょうか。広報担当としてのあなたのお立場はどんなものだったのかなあと想像するんですが。一面では、大恐慌期の落ち込んだ経済状態の中では、地域に転住収容所が建てば、確かに金が落ちるに違いない。反面、インディペンデンスやローンパインといった町に近い土地に敵性外国人やその子供達が収監されるという事には、恐らくかなりの恐れや抵抗があったでしょう。ジレンマを生じさせたように思うんですが。えーと、あなたが強調されたのは...

B：そう、まず第一に、ジョージ・サヴェージとインヨーの新聞社の支持がありました。サヴェージは、終始一貫した姿勢で記事にしたんですが、「某日、ビショップ発」とか、「某日、インディペンデンス発」、「某日、ローンパイン発」といった風にして呉れたんですよ。その内にゃ、ブリッジポート発のものもありました。ジョージは、100パーセント我々を支持して呉れたし、良い面に目を向けてどんどん推進して呉れました。ほら、地域社会にとって良い事なら、憎しみを煽るような人間の言う事に耳を傾けなさんなといった風にね。良い仕事を、とても良い仕事をして呉れましたよ。それから、トム・クラークに任命された委員会メンバーを呼んでおいて、WCCAや陸軍や司法省の人間に来て貰って、徹底してブリーフィングをして貰った。そうすると、今度は、オーウェンス・ヴァレー市民委員会のメンバーのほとんどが、ロータリークラブや、ご婦人達のクラブ、PTAや何やかやに出かけて行っちゃあ話を広める。この件をし逃げなきゃならんとなったんで、速やかにこれをやりました。4日、5日、6日、せいぜい7日の間にですね。振り返って見ると、委員会の発足時のメンバーからは、固い支持を取り付けていました。住民のほとんどは、「模様眺め」的な支持。10パーセント、15パーセント、いや20パーセントかなあ。ひどく反対してる住民がいましたっけ。

H：住民の10パーセント、15パーセントですか？

B：ええ、ひどく反対してました。

H：反対派住民の指導者を思い出せますか？

B：ええ。私は、その男の名前は思い出せないけど、インディペンデンスで自前の民兵を訓練して行進させたりしている男がいましたよ... 「日系人が脱走してきたら、女子供を救え！」と言ってね（笑い）。その男の名

前までは覚えてないなあ。

H：でも、その人間を支持する者はほとんどいなかった？

B：ええ。それから、その頃うちの息子が9歳か10歳だったんですが、家に帰ってこう言うんですよ。「パパは、日本人最良 [Jap-loverという言葉を使っている... 訳者注] なの？」ってね。私が、「どこでそんな事を吹き込まれたんだい？」と聞き返すと、「学校でみんな言ってるよ... おまえのパパは日本人最良なんだって。」

H：息子さんはビショップの学校に通っておられたんですか？

B：そう。

H：それじゃ、ビショップではいくらか反対もあった？

B：ええ、ビショップではそこそこ反対がありました。だけど、事態は極めて好転したんです。何で好転したかお話ししましょう。変化が起こるのに大した時間はかかりませんでした。もともと、10から15パーセントの人達は、それでも我々が間違った事をしていて思っていましたけど。だけど、収容所が動き出すとすぐに、地元の物資が必要になりました。サンフランシスコで買い忘れた機械類から、誰かが注文し忘れた青物類、それに、薬や印刷物や新聞といった物までね。そう、地域のほとんど全住民、とりわけローンパインの住民にすぐに影響を与えたわけです。ビショップでは、ローンパインほどではありませんでした。ローンパインには、突然アングル・サムの金が流れこんでくる事になった。状況は、日系人がいた4年間、ずっとそんな風でしたよ。

H：インディペンデンスはどうでしたか？ 影響を受けましたか？

B：それほどじゃあなかったですね。インディペンデンスには、関係のある人がいませんでしたからね。ちっぽけな八百屋が1軒。ドラッグストアさえ無かったぐらいですから。郡の人間達の弁護をしようというのでそこに住んでいる、元の地方検事や何かの法律事務所があったりはしましたよ。だから、インディペンデンスは、何も利益を受けませんでしたね。

H：それでは、ローンパインが恩恵を蒙っていたという限りで、収容所に対してはローンパインの住民の方が、インディペンデンスの住民より受け入れに肯定的だったと感じたのですか？

B：ええ、そう言えるでしょう。

H：それで、オーウェンス・ヴァレーを北上すると、受け入れにはより消極的になったと？

B：いや、そういう訳じゃあない。みんなは、だいたい理解して呉れましたよ。そんなに張り合うって事もなかったしね。つまりね、ああいって小さな谷間の小さな町々は、時折り対抗心むきだしになるんですよ。ビショップで青物屋を経営する人間は、ローンパインで青物屋を経営する人間をえらく憎むとかね。覚えてる限り、そんな事は無かったなあ。少なくとも、表面には出なかった。そうした競争的でない態度を育んだのは、一つには、クロウリー神父とラルフ・メリットとレイ・グッドマンとがまとめあげたインヨー・アソシエーツでしたよ。月に一度会合があって、「今何が起きてるのか、これから我々はどうしようか」といった事を「胸襟を開いて語り合う」といった態のものでしたよ。営林署の人間に来て貰って営林署の現況を話して貰うとか、高速道路局の人間に来て貰ってこれまた現況を話して貰うとか、新聞関係者に来て貰って新聞社の中がどうなってるか話して貰う、そこに青物屋達も加わって同じテーブルに座るってぐあいでした。だから、ちっぽけな町が沢山ある中で、町同士が喧嘩になるといったような競争心は無かったですねえ。そんなものは無かった。とても団結した社会だったんですよ。「どこのご出身ですか？」と尋ねられると、「オーウェンス・ヴァレーの出身です」「それで、オーウェンス・ヴァレーのどちらなんですか？」「町はローンパインに住んでいます」って具合でね。

H：それじゃ、彼らの身元は第一にこの地域という事で、個々の町は二の次だったのですか？

B：そう、みんなそう答えたでしょうな...ほとんど全員がね。

H：オーウェンス・ヴァレーで開拓者の一族であるというのは、なかなかの地位だということでしょうか？

B：いや、もうないでしょうな。おっと、あるかなあ。そう、当時はありましたねえ。

H：後にマンザナーの所長になったラルフ・メリットやあなたご自身に反発はありましたか？ あなた方お二人は、その地域に住んでいらしたわけだけど、小さな町では、やって来て10年、15年経ってもまだ余所者扱いし続けるところもあるでしょうから。

B：そう、言いにくいですね。分かりませんな。私の事を好きでなかった人間はいたでしょう。私の方でも全くその人達の事を知らないような人間ですな。だけど、概ね、私が知っている人間、あるいは知っていた人間は、極めて友好的でしたよ。ラルフには、もう少し反発する人間が多かった。物議を醸す事のあるタイプで

したからね。ラルフは、大人物でしたよ。考える事が大きかった。着想が豊かだった。

H：メリットをめぐる論議というのは、どんな種類のものでしたか？

B：メリットは、いつでもいづらか論議を呼ぶ人間でしたね。ほら、マンザナーの後メリットは、戦時資産委員会の方に行きました。資産処理の方をやってたんです。空軍基地をお払い箱にするとかそんな事をやりましたよ。それから、ロサンゼルス的高速輸送システムの計画に関わるようになってましたね。高速輸送システムをまとめあげたのがメリットだったのは、間違いありません。この計画に携わっている際にも、色々論議の的でした。でも、メリットはロサンゼルス市議会を長い間味方につけていたんですが、その内に市議会のメンバーも替わる、その連中はメリットのやってる事や何かを気に入らなかつたんですな。だけど、実際にメリットがまとめあげたんですよ。私は個人的に知ってるんでね。私は、息子に近いようなものでしたから。我々は仲がとて良かった。メリットがぐぐった争い事は全部知ってますよ。

H：戦争前に、メリットがインヨー郡の住民との関わりから巻き込まれた論争というのは、どんなものだったのですか？ 尊敬を集めた人物でありながら、どうして住民にとっての論議的になってしまったんでしょうか？

B：そうね、ラルフは大恐慌で破産しました。ラルフは結構な資産を作っていたが、勿論そこに大恐慌が起きて、サンメイトレイズン栽培者協会は破産しました。これで、ラルフも個人的に破産したわけです。ラルフには、インディペンデンスに古い友人がいた。ガン一家です。何にせよ、ジャック・ガンが、デス・ヴァレーの方角にあるミニエッタ鉱山を発見したんですよ。ガンは、そこから大収益をあげた。銀と鉛が採れたんです。そこからの収益は大きかったし、それを使つたんですな。一年かそこら採掘して、家族を連れてどやどやとヨーロッパに押しかけて、そこで一年間過ごすと云った風でしたな。そう、それから死んでしまった。ガンは、つながりは分からないけど、ラルフの父親の旧友だったわけですね。父親は、パークレーで判事をしてたが、出身もそちらでしたよ。父親は、採掘の法律面にも関わつたんでしたよ。ラルフは、破産した頃、ポリオにかかつてね。ガンの奥さんが引き取つて、ラルフは2、3年ガン一家と暮らしましたよ。そこで、実際に鉱山を再開したんですな。再開して、採掘を続けた。政府からローンを借りてね。金属貯蔵公社からね。

H：その頃は、メリットは独身でしたか？

B：いや、結婚してましたよ。ただ、奥さんは別段砂漠が好きじゃなかつたし、ガン一家には含むところがあったんでしょ。それで、オークランドに残っていた。つまり、みんなはラルフの事を良く知っていなかった。それまでずっと食べ物扱っていた人間が鉱山に手を出したという事実があつて、みんなはラルフが一種プロモーターみたいなもんだと思つてしまった。ご存じの通り、そんな人じゃなかつたんですがね。もつとも、みんなはラルフの事を好いてはいなかつたが、いつでも助言を求めにやつて来た。そんなものでしょう？ あんたもこれまで生きてきて見とるでしょう？ そうこうする内に、クロウリー神父と、デス・ヴァレーのレイ・グッドマン、林野部のトップだったロイ・ブース、それにダグ・ジョゼフのような人間達が集まつたんですな。ラルフに対する反感も、人によっちゃあ消えてたでしょうな。マンザナー収容所が開まる頃には、反感があるなんて感じなかつたなあ。ヴァレー中が、ラルフ・メリットの事と、収容所の運営方法を自慢してたと思いますよ。インディペンデンスのアーリー・ブライアリー [『ジャップの収容所』紹介-第Ⅱ部、を参照の事... 訳注] のような人間を除けば、昔からいる人間で誰一人ラルフ・メリットの事を悪く言う者はいないでしょう。いないと思うなあ。いづれにせよ、いて欲しくないですよ。

H：一つ奇妙な状況があるんですが、前に話が出たように、収容所がそこにあるという事で、かなりの利益を得ている地域がここにはあつた。少なくともローンパインではそうです。それにもかかわらず、様々な収容所を取り囲む様々な地域社会についての調査が明らかにしているように、オーウェンス・ヴァレーには、ほかのほとんどの地域には見られない特殊な敵意があつた。そう見える原因の一部は、マンザナーが日系米人人口の重心点に一番近いから、ここに調査が集中したのであつて、ほかの地域については学者が本当には目を向けていないからかも知れない。だけど、周辺住民が収容者が町に出て来るのを許さなかつたのは、マンザナーとツールレークだけだったように思えます。ほかの地域では、しばらく経ってから町が収容者に対して開放された。抵抗もあつたし、収容者達がレストランに行つても食事を出して貰えなかつたり、百貨店に入つても服を売つて貰えなかつたりした事はあつたが、町の側も収容所の側もお互いずっと融け込んでいた。だけどそうした事は、ローンパインやインディペンデンスにはまるで当てはまらなかつたのです。マンザナーが偶々太平洋岸に一番近くて、近いが故に住民が不安を感じていたからだとお考えですか？ こんな状況だっ

た事をどう説明なさいますか？

B：良い質問ですね。どうなのかなあ。ちょっと考えさせて下さい。収容所では、それで悩んだ事は無かったなあ。収容所の歴史がまだ浅い頃に二、三努力はしてみましたよ。ラルフが赴任する前で、ロイ・ナッシュが運営に当たっていて、まだクレイトン・トリッグスがいた頃でした。私達の提案した事の一つは…どこだったかな、ティネメハ湖ですか？ とにかく、ロサンゼルス市の上水道のために貯水してる湖の一つです。うん、ティネメハ湖じゃあないな、もっと下流にある湖だ。

H：リトルレークですか？

B：リトルレークとティネメハ湖の間にある湖ですよ…名前はまた思い出しますよ。いずれにせよ、そこには鯉がうようよいました。それで、日本人は鯉が好きでしょう？ だから、どうして許してやらんのだと言ってみたんですよ…当時は、軍隊がついていて呉れた。いつでも軍隊がついていて呉れましたよね？ とにかく、私達は軍と2隻のランチに載せた日本人漁師達をあそこへ連れて行って、ハイウィー貯水池の鯉を攫ってきたわけです。その事については、喧々囂々たる非難を受けた事を覚えています。「おー、とんでもない事だ。あん畜生どもを収容所から出したりするな。」それで、私達もあっさりと、「ふん、もう知らん。俺達もこんな事止めよう」という事になったのです。私の考えでは、本当に、日本人は町へは行きたがっていません。それこそが、主な理由だったんじゃないかな。私達もその後は二度とやってみようとしなかった。ラルフが着任した後、私達はしまいに収容所をとて静かによく組織だったものにしたので、私達の目にはみんなが満足していたので、どこにも出かけたがらなかったと映ったんですよ。

H：さて、インディペンデンスの二つの情報源から分かったんですが、店主の一人、アレックス・クレーター [アレックス・クレーターは、『ジャップの収容所』紹介-第I部で、3番目に紹介しているキャサリン・クレーターの夫である。キャサリンのインタビューにも同席していた。pp. 14-15を参照の事… 訳者注] という名だったと思うけど、とても熱心で、収容者を町に出て来られるようにしようという運動を実際に始めました。だけど、明らかにその時に反対運動が起きて、寛大な方針はべちゃんこにされたんです。

B：ああ、それはロサンゼルス市に勤めていたアメリカ在郷軍人会の変わり者ですよ（笑い）。実際に、彼はおかしな男で、変人だったなあ。私達はただもう彼についてはくすくすと笑って、「困ったものさ」と言っただけですよ。私達には、必要なだけのテリトリーがあったんですよ。つまり、滝もあれば、広いピクニック向きの土地もあったし…

H：なるほど、収容所は周辺の町に比べてずっとコズモポリタンだったわけですね。つまり、結局マンザナーには1万人も住んでいたんですからね。

B：そうとも。我々が欲しいものは何でもありました。素晴らしい学校も建てたし、大きな公会堂もあって色々な音楽行事も行われた…ええ、あそこで行われていた事には、実に目を見はるものがありましたよ。

H：それじゃあ、町の住民からの敵意はあまり感じなかった？

B：全くね。町の住民からの敵意は感じた事は一度もありませんでした。

H：あなたご自身も町にはかなり頻繁に出かけられたんでしょうね？

B：勿論です。私はビショップに住んでいた。週末には家に帰る事にしていたし、時にはウィークデーにも帰った。副所長になってからは、マンザナーの中に泊まる所を貰いました。若い女性の副所長もいて、教育やら何やら福祉関係を受け持ち、入院の面にも責任を持っていた。それから、エド・フーパーもいて、経理や何かの責任者だった。私は、農業、機械類、警察、製造などの責任を負っていました。私達は、立派に自給自足していました。実質的に必要な物はみんなそこで自前でやっていました。牛も育てた、羊も育てた、豚も育てた、野菜も栽培した。缶詰工場以外は何でもあった。乾燥させて包装もした。ある年には野心を持ってね。40エーカーものトマトを植えた。そりゃすごいで、人生であんなに沢山のトマトを見た事はありません。40エーカー分のトマトがどれほどになるか、私は知らなかったんですな。ロサンゼルス市のハンツ社に送って缶詰にして貰わなければならなかった。

H：実際に、他の収容所向きにいくらか栽培していましたよね？

B：していました。

H：町で、収容所で作った物を売られた事はありましたか？

B：トマトを売ったなあ。

H：ローンパインですか？

B：いや、缶詰工場に売っただけです。いやいや、オーウェンス・ヴァレーの町には、どこにも売った事があり

ませんね。

H：もう一度収容所が始まったばかりの頃に戻りたいのですが、あなたが勤められた時には公にはどういう肩書きでしたか？

B：いわゆる広報官でした。PR部門ですね。

H：それだからあなたは、収容所がまだ建ってない頃からいらした訳ですね？

B：そうです。

H：広報官としての職責はどんなものだったんですか？

B：新聞担当といったところでした。新聞に情報を流すんです。新聞関係者が群れをなしてここにやって来ていたものです。だから、ようやく収容所が発足にこぎつけた時には、私達全員が、何らかのコミュニケーションの手段を持たなければと思っていました。それだからこそ、我々は、『マンザナーフリープレス』紙という新聞を始めたのです。最初は、毎日コミュニケーションがとれるように、ガリ版刷りでやってました。それで、あの若い連中を大量に雇ったんです。連中があの厄介な新聞を運営してたんで、私じゃなかったんです。その後、誰一人広報官は雇いませんでした。私が副所長になった時には、ロイ・タケノが編集長でした。ロイがあの厄介な事をみな片づけていたんです。月給15ドルの広報官だった訳です（笑い）。彼も、南カリフォルニア大の卒業でしたね。ロイ・フレンチの教え子の一人で、新聞作りが大変うまかった。フレンチは、南カリフォルニア大のジャーナリズム専攻学科の学科長でした。タケノは後年、『デンヴァーポスト』紙に勤めました。今やJACLのデンヴァー地区の責任者ですよ。有能な男です。

H：ビル・ホソカワも、『デンヴァーポスト』紙にいましたか？

B：その通りです。

H：収容所を建設したのは誰でしたか？ 地元の人間はどの程度まで携わっていましたか？ 大工やペンキ屋なんか雇われていただけでしたか？

B：収容所を実際に建てるのにあまり多くの地元住民が関わっていたという記憶はないなあ。土建業者がやって来た時に、一緒に労働者達を連れて来たように思います。土建業者は間違いなく地元の人間をいくらか雇ったでしょうけど、その頃この辺りには職人はたいしていなかった。後になって、メンテナンスにはかなり雇い入れましたが。配電関係を見ていたのは、ラルフ・フェイルという人で、地元の電話会社に勤めていました。不動産全体の管理は、あっちの電力会社に勤めていた人間だったな。後になるとかなり多くの地元の人間達を雇いました。だけど、収容所の建設そのものでは、覚えてる限りでは…てんやわんやの時期でしたからねえ。私は、サンフランシスコとリノとロサンゼルスとマンザナーを飛び回っていたんです。新聞関係の雑用があったし、他にもうまく運ぶように色々な事を制度化したりしてたんで、ほら、建設を始めた時にはその場にはいなかったんですよ。最初で最後の自発的な移住^{エクスツグス}があった時には、あそこにはいたがね。1,000人もの日本人が車でやって来る決心をして、軍が護送して来た。その時に来た人達が、収容所を本当にスタートさせたキーパーソンとなった人達でしたよ。医師もいたし、看護婦もいたし、コックもいたがね。

H：彼らは精選された者達だったのですか？

B：ある程度そうだったんでしょう。WCCAの連中がポモナ仮収容所やどこから集めたんでしょうな。だけど、私の知る範囲では、突然あの連中がここに現れた。やって来られた日の晩に、連中を寝かせるベッドを置く場所があっただけでも、めっけものでしたよ。彼らがあそこを引き継いで運営するチームの走りだったんですよ。とても有能な連中だった。例えば、ジェームス・ゴトー医師。とびきりの専門家でしたよ。実際、たいした人物だった。

H：その人は存命ですか？

B：じゃないかな。トーゴー・タナカのような人なら居場所を知ってるんじゃないかなあ。

H：ゴトー医師は、心臓外科医だった人ですね？

B：でしょうね。そうだったと思いますよ。若い人だったがね。全く何にもなかったところから、見事に病院を作り上げた。すごい大仕事をやってのけたんですよ。

H：スタート時点で目についた他の人物も挙げて頂けますか？

B：うん、そう、トーゴー・タナカは自発的にやって来た内の1人でしたよ。

H：彼は、実際には少し経ってからやって来たと思うんですが。

B：そうなの？ 私は、彼は初めの1,000人と一緒にやって来たんだと思っていた。

- H : 違うんです。彼が書いた報告書の中で指摘してるところでは、収容所には彼の呼ぶところの「反JACL派」がいた。そう呼んだのは、その一派が、戦争に相対してのJACLの立場に共感しなかったからではなく、JACLにいくらか懸念を抱いていた上、政治的にJACLよりさらに進歩的だったからです。タナカの記すところでは、収容所のほとんどの地位は埋まってしまっていた。タナカとジョー・マサオカは、『マンザナーフリープレス』紙の配達の仕事にありついた。それと言うのも、『マンザナーフリープレス』紙の編集にも、収容所のほとんどの地位にも、もうスタッフが就任してしまっていた。後になって、部分的にはマンザナー市民連盟というグループを通してですが、JACLが、収容所の要職といったものを何とか引き継ぎ始めた。
- B : そうかも知れない。そうなんでしょうな。ほら、トーゴはあそこにそんなに長くいた訳じゃない。1942年12月のマンザナー暴動の後、彼はあの一派と一緒にデスヴァレーに行った。当局は彼をそこから出してシカゴに送り返した。トーゴは、たった4、5ヶ月しかマンザナーにはいなかったんですよ。
- H : 私がいくらか関心を持ってる男で、あなたの下で働いていた男がいたんですが、デヴィッド・イタミといいます。彼は、『マンザナーフリープレス』紙で暫くの間、あなたの助手を務めていたと思うんですが。
- B : そうとも、デーヴは『マンザナーフリープレス』紙の日本語部門で翻訳を全部こなしていましたよ。しまいには、陸軍に入った。マッカーサー将軍との会議に出席してましたよ。軍では、マッカーサーのための翻訳はみんな彼がやったんですよ。
- H : 本当ですか？
- B : そうですよ。
- H : 彼は最初にマンザナーを出所しました。志願して軍の語学学校で日本語を教えた。それも、暴動の前だったと思いますが...
- B : デーヴは、そう、デーヴは...^{キベイ}帰米 [Kibeiと表記。米国生まれだが、日本で教育を受けてから再び帰米した(主として)二世を指す... 記者注] でしたよ。つまり合衆国生まれだが、日本で教育を受けたんです。そう、新聞を始めてすぐに私達は日本語部門が必要だと気づいて、私がどこかでデーヴを見つけてきて、彼が全て手書きで書いたんです。彼がガリを切って、私達が謄写版印刷をしたんです。英語を読めない一世全員にそれが渡りました。デーヴは軍でも高い地位に上りましたよ。おやまあ、私はもう長い事、デーヴの事を考えた事がなかったなあ。おかしなもんじゃありませんか？
- H : あなたとほぼ同時期に収容所に着任した管理部門の人間をいくらか挙げて下さいませんか？ あなた自身は広報官でしたが、他にどんな人がいましたか？ トリッグスが収容所の運営に当たっていたんですね？
- B : トリッグスが収容所の運営に当たっていました。もう亡くなりましたが。後になって戦争で大活躍しました。大西洋で零度以下の中で、救命艇に乗っていて7日間生き延びたりしたんですよ。おっと、キッドウエルという男もいました。姓しか覚えていませんが。
- H : ネッド・キャンベルは初めからプロジェクトの副責任者だったのですか？
- B : いや、副責任者はシ・フライヤーでした。WRAが引き継いだ時に、シ・フライヤーも残った。所長にはロイ・ナッシュが着任しました。初めの頃のスタッフの事はあまり沢山は覚えていません。実際覚えとらんですよ。私は新聞に私達を援護して貰うのに忙しかったから、そちらにかかりきりでした。そう、時には、日に15人、20人相手に毎日ブリーフィングをしましたよ。記者は、英国、オーストラリア、どこからでもやって来ましたよ。マンザナーが最初の収容所だったからね。
- H : なるほど。
- B : ええ、新聞には助けて貰いました。そうしたブリーフィングについちゃ、いくつか素晴らしい話があるんですよ。
- H : 次のインタビューのお楽しみに取っておきませんか？
- B : 私の方はそれで結構ですよ。このインタビューってやつは、えらく消耗する事がありますねえ。

Ⅲ. 総括

(A)

ロバート・ブラウンのインタビューの項には、新聞記事の切り抜きが4枚、写真版で載せられている。以下に内容を紹介する。

1) 1942年3月6日。『インヨーインディペンデント』紙の記事。

見出し：オーウェンス・ヴァレーに日本人収容所建設の提案

内容：昨日昼に、いかにもという噂が流れた。カリフォルニア州の合衆国陸軍が設ける日本人および日系米人の転住収容所 [resettlement campsという表現が使われている... 訳者注] の一つが置かれる場所として、オーウェンス・ヴァレーが選ばれたという。／昨日のラジオ放送では、オーウェンス・ヴァレーは、その種の収容所10ヶ所に含まれるという。反対意見は概ね、陸軍が接触した地元住民と、ロサンゼルス市当局両者によるものである。もっとも、三四日の内には話を進めなければならない陸軍は、オーウェンス・ヴァレーが気に入っている。／この号が発行される前にしかるべき情報が入った場合には、ヴァレーのすべての新聞に、付録ページが付く予定である。[下線... 訳者]

2) 1942年3月6日。【インヨーインディペンデント】紙の付録記事。

見出し：司法長官オフィスがインヨー郡住民に集会を呼びかけ；計画は極秘にという指令

内容：先週金曜日に合衆国陸軍将校団が、日本人を収容する可能性のある場所の視察のためスタッフを伴ってオーウェンス・ヴァレーを訪れた。／トム・C・クラーク司法長官補を通してであるが、ワシントンのピドル司法長官オフィスの要請を受け、インヨー＝モノ協会のボブ・ブラウンが、ヴァレーの住民と会合を持った。第一次世界大戦時の連邦政府とのつながりのために、ラルフ・P・メリットも出席した。ロイ・ブースが一行の足回りを依頼されたほか、ヴァレーの新聞三紙の共同所有者であるジョージ・W・サヴェージが、後刻呼び出された。会話の内容に鑑みて、出席者全員が、陸軍および司法省により、一件を極秘扱いにするよう要請された。／陸軍将校達は、こうした方向性の中でオーウェンス・ヴァレーの抱える諸問題を完全に認識している。／司法長官オフィスは、ヴァレーのために収容者によってなされる可能性のある地元公共事業の長期的計画につき調査をした。目下の所、この計画は流動的である。この地域に連れて来られる日本人の生活だけでなく、市民達にとっても長い目で見ると助けになり保護にもなるという目論見から、上の計画がこの地域社会にとっての恩恵となるように、ロサンゼルス市当局だけでなく、関連中央官庁が多大な努力を払っていると我々は知らされている。／日本人は全員がアメリカ市民である。可能ないかなる方法によってでもアメリカ政府の力になりたいという願いを彼らは表明している。彼らの協力と、トム・クラークの事務所の立案した職業機会を通して、輪郭を上記した計画に参加する事で、彼ら日本人がアメリカ政府への義務を果たす機会を得られるかも知れないと見なされている。[下線... 訳者。1) の記事の下線部とは齟齬を来している]

3) 1942年3月20日。【インヨーインディペンデント】紙の記事。

見出し：郡の諮問委員ら指名さる

内容：サンフランシスコ発、3月15日／戦時軍属管理局における軍属のチーフであるトム・C・クラークが、オーウェンス・ヴァレーの市民からなる委員会を指名した。この委員会は、オーウェンス・ヴァレーの住民及び企業と、現在建設中のマンザナー日本人受け入れ収容所 [reception centerという表現が使われている... 訳者注] の運営に携わる連邦政府当局との間の連絡役を務める。／委員会は、執行部7名と13名の諮問委員からなる。／第一次大戦中にカリフォルニアの連邦食糧管理官であり、カリフォルニア大学の元経理部長であった、ビッグパインのラルフ・P・メリットが、委員会の議長に選出された。／インヨー＝モノ協会の幹事であるロバート・L・ブラウンが、調整委員会の幹事役を務める。／他のメンバー紹介／委員会の他のメンバーには、インヨー郡で新聞三紙を発行している、インディペンデンスのジョージ・W・サヴェージ。インヨー・アソシエーツ会長のダグラス・ジョゼフ。インヨー郡上級裁判所判事で、郡防衛委員会委員長のウイリアム・D・デヒー。ローンパインのR・R・ヘンダーソン。ローンパインのハワード・W・デューカー医師らがいる。／諮問委員会のメンバーは、以下の通りである。ピショップのロイ・ブース。デス・ヴァレーのT・R・グッドウィン。ピショップのS・W・ロウデン。インディペンデンスのT・R・シルヴィアス。ピショップのウィラード・ウェード。ローンパインのジョン・リュブキン。インディペンデンスのジョン・バクスター。インディペンデンスのジョージ・フランシス。インディペンデンスのドロシー・C・クレイゲン。インディペンデンスのアン・マーグレーヴ。ピショップのチャールズ・W・アンダスン医師。ピショップのフランク・パーチャー。インディペンデンスのマイロン・ヘッセ。

4) 1942年3月20日。【インヨーインディペンデント】紙の記事。

見出し：モノ郡羨望／ジャップ・キャンプがインヨー郡に

内容：モノ郡住民が、オーウェンス・ヴァレーに日本人疎開収容所 [evacuation centerという表現が使われている... 訳者注] を設ける計画がある事を認識している様子だと、【ブリッジポートクロニクルユニ

オン」紙は社説で述べている。引用すると以下の通りである。

「ラジオで放送された報告を確認して、先週インヨー郡の新聞各紙は、郡のマンザナー周辺の地が太平洋岸から疎開させられる5,000から10,000人の日本人の受け入れ先選ばれたという号外を出した。

「この号外が出されてからというもの、隣の郡〔インヨー郡を指す... 訳者注〕の住民の中には、このニュースを今度の戦争に勝つために我々が払わなければならない努力の一部に過ぎないと捉えていて、ヴァレーに沢山の日本人を抱えるからと言って不安がっていない住民達もいる。かと思えば、自分達の真ん中に敵国の血を引く者のいる事に恐怖や懸念を表明する住民達もいる。

「インヨー郡にそうした受け入れ先を設ける事は、たぶんモノ郡には影響をほとんど与えないだろう。我々としては、そうしたプロジェクトの場所選ばれた事はインヨー郡にとって幸運だったと感じている。／我々の見る所では、収容される日本人が悪事を働く可能性も、インヨー郡に余計な出費を強いる可能性も、無視できる程度のものであろうし、逆に実業家や商店主にもたらす収入は驚く程のものになるだろう。また、国を愛する者として、我々は喜んで手を貸したいし、そうした収容所に適した利用可能な土地を有している事は特権であると感じるべきであろう。

「冬季の深い雪や地勢のために、わが郡にこの種の収容所を設ける事が出来なかった点が残念である。インヨー郡が受け入れ先選ばれた事を羨むのは、我々にとって『すっぱい葡萄』となるだけだろう。

(B)

池田が学部学生時代に、アメリカ人教師から、年配のアメリカ人なら全員が、事の起きた時自分達がどこにいて何をしていたか確実に覚えている事件が二つはあると言われた（同様な表現は、スタインベックも *America and Americans* に記している）。その二つとは、パールハーバーと J F K の暗殺である。2001年9月11日は、後世になって、上記二つに匹敵するような衝撃を与えた日であったと回想されるかも知れない。本論文のレジюмеにも記している Roger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out*, 1986 の拙訳「リロケーションー日系米人強制収容の証言」が出版されたのは、1991年の3月であった。「訳者あとがき」に、池田は以下のように記した。

「... アメリカ合衆国のような多民族国家（それは我が国の近い将来の姿かも知れません）では、その構成要素のエスニック・グループの【父祖の国】と合衆国との関係の悪化が、国内のエスニック・グループへの敵意となって現れることが珍しくありません。その時、その社会がどこまで理性と抑制とを保ち得るかが、言葉の正しい意味での【民度】のように思えてなりません。／アメリカ合衆国は現在故国を遠く離れて軍隊を展開させています。戦時ヒステリアが起ころぬという保証はありません。日系人の体験を思い起こすことは、国籍の如何を問わず意味のあることではないでしょうか。...」

それから、10年後、奇しくも当時の大統領の息子が大統領に就任した年の9月11日に同時多発テロは起きた。その後のアメリカ社会を見るにつけ、いくつかの発言や事象には注目しておきたい。因みに、1)には1964年の「トンキン湾事件」への反省がこめられており、2)では、マッカーシズムなどへの反省が生かされていると判断し得よう。

1) 2001年9月14日に連邦下院で、バーバラ・リー議員（カリフォルニア州9区選出、民主党。なお、9区には、Albany、Berkley、Emeryville、Piedmont、Oakland、Alamedaなどの都市が含まれる）が「報復戦争」に唯一人反対した。以下に発言内容を紹介する。

Statement of Rep. Barbara Lee on the floor of the House of Representatives
Sept. 14, 2001.

Mr. Speaker, I rise today with a heavy heart, one that is filled with sorrow for the families and loved ones who were killed and injured in New York, Virginia, and Pennsylvania. Only the most foolish or the most callous would not understand the grief that has gripped the American people and millions across the world. This unspeakable attack on the United States has forced me to rely on my moral compass, my conscience, and my God for direction.

September 11 changed the world. Our deepest fears now haunt us. Yet I am convinced that military action will not prevent further acts of international terrorism against the United States. I know that this use-of-force resolution will pass although we all know that the President can wage a war even without this resolution. However difficult this vote may be, some of us must urge the use of restraint.

There must be some of us who say, let's step back for a moment and think through the implications of our actions today—let us more fully understand its consequences. We are not dealing with a conventional war. We cannot respond in a conventional manner. I do not want to see this spiral out of control. This crisis involves issues of national security, foreign policy, public safety, intelligence gathering, economics, and murder. Our response must be equally multi-faceted. We must not rush to judgment. Far too many innocent people have already died. Our country is in mourning. If we rush to launch a counter-attack, we run too great a risk that women, children, and other non-combatants will be caught in the crossfire. Nor can we let our justified anger over these outrageous acts by vicious murderers inflame prejudice against all Arab Americans, Muslims, Southeast Asians, or any other people because of their race, religion, or ethnicity.

Finally, we must be careful not to embark on an open-ended war with neither an exit strategy nor a focused target. We cannot repeat past mistakes. In 1964, Congress gave President Lyndon Johnson the power to “take all necessary measures” to repel attacks and prevent further aggression. In so doing, this House abandoned its own constitutional responsibilities and launched our country into years of undeclared war in Vietnam.

At that time, Senator Wayne Morse, one of two lonely votes against the Tonkin Gulf Resolution, declared, “I believe that history will record that we have made a grave mistake in subverting and circumventing the Constitution of the United States..... I believe that within the next century, future generations will look with dismay and great disappointment upon a Congress which is now about to make such a historic mistake.”

Senator Morse was correct, and I fear we make the same mistake today. And I fear the consequences. I have agonized over this vote. But I came to grips with it in the very painful yet beautiful memorial service today at the National Cathedral. As a member of the clergy so eloquently said, “As we act, let us not become the evil that we deplore.”

2) 2001年11月下旬に、オレゴン州ポートランド市の警察が人権擁護の州法（通称「反マッカーシー法」）を盾に、アラブ系留学生らのプライバシーに触れる聴取についてはFBIへの協力を拒否。11月30日付の【ロサンゼルスタイムズ】紙（ポートランド市警の長であるクロカー氏は、ロサンゼルス市警に32年間勤務してから2年前にポートランド市警に移った）から関連記事を転載する。

Now Portland Comes In for Questioning

Probe: Oregon city and its police chief catch flak for refusing to interview foreigners on a U.S. list.
By LYNN MARSHALL and TOM GORMAN, Times Staff Writers

PORTLAND, Ore. — Even after a 32-year career with the Los Angeles Police Department and two years here, Police Chief Mark Kroeker says he has never experienced the pummeling he is taking these days.

Law enforcement officers in the rest of the nation are questioning foreigners about their possible knowledge of terrorist activities. But Kroeker, worried about civil rights violations, has said his officers will not join in this task. His is the only police agency in the country to refuse to cooperate for such reasons, according to a spokesman for the U.S. Justice Department.

Because of that decision, based on advice from Portland's city attorney, Kroeker is winning plaudits from civil libertarians. But he is catching flak from all over the country.

By Thursday, City Hall computers contained more than 1,000 e-mails. Half came from outside Oregon and were, one staffer said, universally critical of the city's position. From within Oregon, 60% of the electronic mail chastises the city for refusing to aid the investigation.

“I am appalled and embarrassed to be an Oregonian,” wrote one local man. “You . . . have completely lost perspective and what appears to be any remnant of common sense.”

And another: “We are disgusted and saddened. . . . We consider the city of Portland and the state of Oregon to be a haven for terrorists. We will discontinue traveling there as a company.”

The director of the Citizens Crime Commission said he worries that the city attorney's ruling

besmirches the city.

"Now it's a national story: Portland isn't cooperating," said Ray Mathis. "It makes the city look bad."

Criticism also is coming from within the ranks of the Police Bureau. "We're embarrassed by the city's decision," said Leo Painton, an officer with the Portland Police Assn. "We're in a state of war, and we want to go out and do our part, to help solve the 4,000 murders they're investigating."

Chief Kroeker is reeling from the broadsides.

"I'm surprised by the reaction . . . and, to some extent, I feel I've been vilified," he said Thursday. "I've never experienced anything like this."

"I must say, it has been discouraging to hear the level of uninformed criticism and the lack of knowledge of all the work that we have done and are continuing to do to investigate terrorism," he said.

The uproar stems from a request earlier this month by U.S. Atty. Gen. John Ashcroft that law enforcement agencies help an overwhelmed FBI to interview about 5,000 men of Middle Eastern descent who have entered the country in the last two years. The men can decline to be interviewed.

The Justice Department identified 23 residents for questioning in Portland, a city of 503,000. The Oregon state attorney general and the local district attorney said they had no problem with Ashcroft's request.

Corvallis, south of Portland, also is not going to interview 30 Middle Eastern men identified by the Justice Department. Police Chief Pam Roskowski said she had no legal objections to the questioning, but that her college town of 50,000 would be better served if police focused on active criminal investigations.

Portland City Atty. Jeffrey Rogers had issued an opinion that, based on his reading of Oregon law, some of the questions were illegally intrusive if asked of people who were not criminal suspects.

Some questions deal with the subject's sources of income, education and foreign travel; others focus more specifically on the person's knowledge of terrorism and weapons.

Kroeker said he has no objection to questioning foreign men, with their consent, "as a fact-gathering mechanism, a search for clues. This is a perfectly legitimate investigative technique."

But because a few of the questions "about the law," Kroeker said his officers won't ask any of them. The FBI said other agencies will interview the Portland men.

Portland Mayor Vera Katz stands firmly behind the city attorney and police chief. "I support the president," she said Thursday, "but for the citizens of this city to say that this [refusal] is a treasonable act—that it's OK to break the law—raises tremendous concerns."

The city's decision is "a courageous call—and the right call," said David Fidanque, executive director of the ACLU of Oregon. "It's good to know there is a police agency in Oregon that is serious about not only investigating terrorist activity, but also is serious about protecting the rights of innocent people who may be swept up in this very broad investigation."

Reaction on the street was decidedly mixed Thursday.

"My father is from Saudi Arabia and all my family is living in New York," said hairdresser Karina El Hindi, 27. "I want these [terrorists] caught, but I don't think a sweep of people who look like me or my dad will have any effect."

"Portland's refusal to participate," she added, "says that all people are welcomed and treated fairly here."

John Peters, a 23-year-old graduate student, agreed. "I want to be safe from terrorists," he said while strolling through downtown's Pioneer Place shopping center, "but if we start questioning people based on race or national origin, where does it stop, and what's left of the system once this is all over?"

Others figured that now is when laws can be bent. "The questions are probably offensive, but if they save even one life or send a signal that America is more vigilant now, I think that's much more

important than a legal technicality,” said Judy Rader, 38, an executive assistant at a downtown business.

Kroeker left the LAPD as its deputy chief in 1997. Popular among the rank-and-file, he placed second to Bernard C. Parks for the chief's job. Under Parks, he had complained to colleagues that he felt ostracized.

In Portland, Kroeker bristles at the notion that his department is not carrying its weight in the fight against terrorism. “This isn't crazy Portland politics,” he said. “We're just trying to do the right thing.”

Charlie Mathews, FBI special agent in charge in Portland, said that despite the differing legal opinions, Kroeker's officers are actively involved on his 35-member anti-terrorism task force. “They're our best partners,” Mathews said.

“I appreciate the difficult situation he's in,” Mathews said. “His attorney has given him advice and he's following it, which is what a professional does.”

For all the civic debate over Kroeker's position, computer programmer Phil Jarvis, 33, said he can predict the ultimate outcome: “This will all blow over in six months. Portland already has a liberal reputation and, at the most, this will just become part of that.”

3) 勿論、日系人に対するような「強制収容」は行われなかったが、アラブ系住民「等」へのhate crimeは、各所で見受けられた。カテゴリー化の曖昧さ（例えば、「アラブ系」とか「ムスリム」のような大まかなカテゴリー化）や誤認により、（存在するとして）「直接の敵」やそれにつながる者だけでなく、むしろテロに批判的な者達、あるいは迫害を蒙って合衆国に逃れて来た者達へも嫌がらせや迫害があった事例がいくつも伝えられている。ただし、2002年1月中浣現在で、幸いにしてマスヒステリアのレベルには達していないようである。因みに、2002年1月13日付の朝日新聞朝刊の連載【アメリカ・アメリカ】最終回（第12回）の後節は以下のように締め括られている。

「...「あなたは何を心配しているのか。この民主主義の国でそんなことがあるのか」。全米日系市民協会の事務局長ジョン・タテイシ（62）は、取材に来たアメリカ人記者に問いただされた。／テロを知って、タテイシはとっさに直感した。真珠湾攻撃後に日系人が経験した悲劇が中東系に降りかかる——／事態はタテイシが危ぐした通りになった。中東からの移民が射殺され、イスラム教徒が各地で嫌がらせを受けた。／タテイシは各地の支部に指示を出した。「日系人の経験を市民に話す場を設けなさい」。その動きを、多くの米メディアが取材した。／取材にはいつも、こう答えた。「何をすべきかはすぐ分からなくても、何をすべきでないかは歴史が教えてくれる」／アメリカ社会は、偏狭な揺れを戻しつつある。この国の多様な文化や価値観が暴走をくい止めたように見える。／テロから4ヶ月。／タテイシには年配の日系人から励ましの電話がかかってくる。「アメリカがおかしな国にならないよう頑張ってくれ」／高橋ら5人〔核廃絶を訴えに渡米した日本の市民運動家達... 引用者注〕は11日、真珠湾のアリゾナ記念館を訪ねた。報復の連鎖を断ち切れるか。自信はないが、仲間で励まし合った。「アメリカには市民が政府を変える力がある。一人ひとりの正義を信じよう」〔下線... 引用者〕

<何をすべきかはすぐ分からなくても、何をすべきでないかは歴史が教えてくれる>... ここで、既に27頁に引用してあるが、拙訳【リロケーション—日系米人強制収容の証言】の「訳者あとがき」中に記した言葉を再掲する事にしたい。

「... アメリカ合衆国のような多民族国家（それは我が国の近い将来の姿かも知れません）では、その構成要素のエスニック・グループの【父祖の国】と合衆国との関係の悪化が、国内のエスニック・グループへの敵意となって現れることが珍しくありません。その時、その社会がどこまで理性と抑制とを保ち得るかが、言葉の正しい意味での【民度】のように思えてなりません。／アメリカ合衆国は現在故国を遠く離れて軍隊を展開させています。戦時ヒステリアが起ころぬという保証はありません。日系人の体験を思い起こすことは、国籍の如何を問わず意味のあることではないでしょうか。...」

(2002. 1. 31)